

2011 年度第 2 回日本語教育巡回研修会：報告

第 2 回の日本語教育巡回研修会は、横浜国立大学教育人間科学部教授、河野俊之先生をお迎えし、「学習者自身で発音を直す教育ー自己モニターを活用した音声教育ー」というテーマで実施しました。

日時：（高雄会場）2011 年 9 月 4 日（日）10：00 ～ 17：00（交流会 17:00～18:00）
於）文藻外語學院
（台中会場）2011 年 9 月 6 日（火）10：00 ～ 17：00（交流会 17:00～18:00）
於）麗加園邸酒店
（台北会場）2011 年 9 月 7 日（水）10：00 ～ 17：00（交流会 17:00～18:00）
於）交流協会台北事務所・文化ホール

参加者：台湾の日本語教育関係者

高雄会場 42名（うち交流会25名）
台中会場 45名（うち交流会21名）
台北会場 57名（うち交流会25名）

配付資料：こちら（PDF ファイル：Acrobat Reader が必要です。）

研修会では、まず、＜ワークショップ 1・講義 1＞として、参加者がグループに分かれ、現在の音声教育の問題点について話し合うことから始まりました。その後、発音指導のビデオを視聴。その中に登場する教師の教え方に注目し、その感想をグループで共有しました。ビデオの教師は、自分の音声をまねさせながら、学習者に繰り返し発音させていましたが、河野先生は、発音矯正が音声教育としてはあまり効果がないことを指摘されました。例えばモデル音声を繰り返す過程で、たまたまうまく発音できたとしても、すぐ元にもどってしまったり、教師の指摘は理解できても、それが実際の発音に結びつかなかったり、という問題が存在する。つまり、繰り返させたり、説明したり、見せたりしながら発音矯正をすることでは問題は解決しない。きちんとした計画に基づいた音声教育が必要であり、そのために、教師の能力が問われていると話されました。

次に、配布資料「台湾人の発音の問題点」を各自でチェック、周囲の人と見比べながら、台湾人の発音の問題点を意識させました。

＜ワークショップ 2・講義 2＞では、今までの音声教育とは異なる、自己モニターを活用した音声教育についての解説がありました。

まず、「ぞ」「じょ」の言いわけが正しくできる韓国人学習者を例にあげ、その学習

者たちは、自分でうみだした「独自の基準」を持っていること、そして、その基準を意識しながら言葉を聞き分けたり、言い分けたりしていることが紹介されました。今までの音声教育は、教師が正解を持っていて、学習者にそれを伝える、という形でしたが、今後は学習者自身が試行錯誤しながら独自の基準をみつけていく、教師はそれを援助する役割に変わっていくことが必要であること、そして、独自の基準は発音にとどまらず、文法・語彙の学習の際にも有効であると説明されました。

その後、河野先生が台湾人学生5人に対して行った模擬授業の様子をビデオで観察、自己モニターを活用した音声教育の手順を確認しました。

<ワークショップ3>では、自己モニターを活用した音声教育を行う際の注意点について考えました。先の、模擬授業を見た参加者の質問や感想に、河野先生からのていねいな回答、コメントがありました。また、インドネシア人留学生を対象とした授業の様子をビデオで視聴しながら、授業における教師の関わり方について、皆で考えました。

音声教育における教師の役割とは、学習者が「・独自の基準を考える、・独自の基準を基に自己モニターを行う、・基準・発音を修正していく」のを支援していくことであると結論づけられました。

参加者からは「教師の役割について、一方的に教えるというだけではないことに気がついた」「自己モニターという考え方は新しい発見だった。今度の授業でうまく取り入れていければと思う」「台湾の学生を対象とした模擬授業の録画を研修会で使うのは素晴らしいことだと思う」等の感想が寄せられました。

<研修会の様子>



河野俊之先生



高雄会場にて